

『沙石集』『先生の父の雉になりたるを殺したる事』を読む

——「言語文化」の授業について考える——

中 川 眞 二

平成三一年一月一四日、明星大学において「古典は本
当に必要なのか」と題されたシンポジウムが行われ、高
校等において「古典教育」が必要かどうかについて、否
定派・肯定派それぞれの意見が交換された。現代の国語
科教育においては、そのようなシンポジウムが行われる
くらい古典教育に関する課題が山積している。

そうした状況のなか、令和四年度からは高校において
新しい学習指導要領による教育が始まる。平成三〇年七
月に発表された『高等学校学習指導要領解説 国語編』
の「第二節 国語科改訂の趣旨及び要点」¹⁾「一 国語科
改訂の趣旨及び要点」には、

○高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な

言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授
業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必
要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し
目的に応じて適切に活用すること、多様なメディア
から読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に
基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や
特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低い
ことなどが課題となっている。

と、「教材への依存度」の高さ・「主体的な活動」の軽
視・「講義調の伝達型授業」への偏りといった課題を克
服するための授業改善の必要性を示すと同時に、「古典
に対する学習意欲が低いこと」という課題が挙げられて

おり、その対策の「科目構成の改善」として、

○国語は、我が国の歴史の中で創造され、上代から近現代まで継承されてきたものであり、そして現代において実社会・実生活の中で使われているものである。このことを踏まえ、後者と関わりの深い実社会・実生活における言語による諸活動に必要な能力を育成する科目「現代の国語」と、前者と関わりの深い我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力を育成する科目「言語文化」の二つの科目を、全ての高校生が履修する共通必修科目として設定する。

と、現行の「国語総合」に変わり、「現代の国語」と「言語文化」という二つの科目を、全ての高校生が履修する共通必修科目として設定する」と述べられている。

本稿では、そのうちの上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることを主眼とする「言語文化」の授業について考えたい。「言語文化」

については、『高等学校学習指導要領解説 国語編』において、

言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのものの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用するることによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指す。

と定義されており、「言語文化」は、「文化としての言語」、「言語芸術や芸能」など、文化全般を指すということになる。また、『高等学校学習指導要領解説 国語編』の「三 内容」のなかの「(2) 我が国の言語文化に関する事項」に挙げられた項目の一つ「イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること」や同じく「三 内容」の「B 読むこと」⁽²⁾「(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。」のなかの項目の一つ「エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、

内容の解釈を深めること」において、

作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めることを示している。

作品や文章がどのような歴史的・文化的事実を背景にして生まれたのか、また、他の作品や文章とどのように関わり合っているのかという点について理解を踏まえ、内容の解釈を深めることを目指している。

(中略) 作品や文章の成立した背景を踏まえるとは、読む対象とした作品や文章だけでなく、その成立した背景となった情報にも目を向け、調べるなどして知識を広げ、作品や文章の内容の解釈を行うに当たって、それらの知識を関係付けることである。

また、「言語文化」で教材とする作品や文章は、他の複数の作品と関わりをもつて成立していることが少なくない。例えば、近代以降の小説の中には、古典の説話や中国の伝奇小説を基にしたものもあり、小説とその典拠と比較しながら読むことによつて、より内容の解釈を深めることができる。他の作品などとの関係を踏まえるとは、このように、対象とした作品や文章と関係のある他の作品を読み、両者の

関係を理解した上で対象とした作品や文章の内容の解釈に向かうことである。

小説と原作とを比較すると、例えば、ある出来事の経緯や物語の構成にいくつかの相違が認められる。

このことを踏まえて作品に描かれた人物像を解釈することによつて、一つの作品だけを読むことでは得られない新たな発見や問いが期待できる。内容の解釈を深めるとは、このように、作品や文章の内容を様々な観点から捉え直し、新たな発見や問いを抱きながらその意味付けを更新し、内容の解釈をより精緻で深いものに統合していくことである。

(傍線筆者)

と、「言語文化」の授業では「古典の説話」を原作とした「近代以降の小説」が科目の教材として設定されているとともに、原作との比較を通して、「一つの作品だけを読むことでは得られない新たな発見や問いが期待できる」ということが、想定されているのである。

本稿では、そのような「言語文化」という科目の教材として、『沙石集』『巻第九』所収の「先生の父の雉になりたるを殺したる事」が有効であることを示すとともに、

「古典」の導入教材としても有用であることを、授業実践例等も示しながら、実証していきたい。

以前拙稿において、現代文の授業のなかで、古典作品のなかの「羅城門（羅生門）」がどのように描かれ、それが芥川龍之介の『羅生門』の「読み」にどのような影響を与えるかということについて論じた³。そこでは、古典作品から現代文教材へのアプローチを試み、そのなかで「現代文」との境を取り去った「国語」の授業実践とその例について考察を加えた。本論では、『沙石集』「巻第九」所収の「先生の父の雉になりたるを殺したる事」と、それを典拠として成立した小泉八雲『骨董』所収の「雉子の話」を比較することを通して、『沙石集』「先生の父の雉になりたるを殺したる事」の読みを深めることに主眼を置きたい。つまり、現代文の小説から古典作品の「読み」について考えるということになる。なお、本授業の対象は高校一年生で、「古典」の導入として実施した。

授業のテキストであり、現在の教科書に収められている教材でもないので、少々引用が長くなるが、それぞれの本文を挙げることにする。実際の授業においては、この『沙石集』の本文（現代語訳なし）と「雉子の話」の

本文を上下にプリントし、配布した。『沙石集』の本文は「市立米沢図書館蔵本（興譲館旧蔵）」を底本とした『新編日本古典文学全集 沙石集』（小学館）を、「雉子の話」の本文は『小泉八雲全集 怪談』（新潮文庫）を使用した。まず、『沙石集』の本文を以下に挙げる。

十一 先生の父の雉になりたるを殺したる事

美州に遠山と云ふ所に、百姓が妻、夢に見けるは、死せし舅来りて云はく、「明日、地頭殿の御狩に、我が命、助かりがたかるべし。この家に逃げ入る事あらば、いかにもして隠して助けよ。生々世々に嬉しと思はん。我本より、片目の盲ひたりしが、當時も変はらぬを、印と思ひ給へ」と、物思ひたる姿にて、泣く泣く語ると見て、あやしく、哀れに思ふほどに、次の日、地頭殿の鷹狩しけるに、雉、家の内へ飛び入りぬ。夫は他行して、妻ばかりありけるが、「夢に見つるに、この事にや」と思ひ合はせて、この雉を取りて、釜の内に隠して、蓋をうちして置きぬ。狩人、とめて入りて見けれども、釜の内を思ひもよらずして、求めかねて返りぬ。

さて、夫、その夜返りたれば、妻、「しかしか」と委しく語る。さて雉を取り出して見れば、夢に違はず、片目盲ひたり。夫、かいなでければ、恐れたる気色もなし。「哀れなる事かな」とて、この妻も涙を流しけり。雉も涙を流して、吉く飼ひたる如くに、鳥の見えけり。

さて、夫申しけるは、「げにも父にておはしけり。生きておはせん時も、目の悪しく、おはせしが、違はぬ事の哀れさよ。親子の契りなれば、父の慈悲いとほしく思ひて、子に食はれんやとてこそおはしつらめ」と云ひて、ねぢ殺しけり。この妻、あまりに心憂かりければ、やがて家をつき出て行くを、夫、逃さじとす。はては、地頭に訴ふれば、事の子細を聞きて、「逆罪の者にこそ」とて、境を追ひ越して、妻は、「情けある者なり」とて、その家を給びて、公事なんと許されけり。この四、五年が中の事と、ある人語りき。⁴（巻第九）

次に、小泉八雲の「雉子の話」の本文を挙げる。

尾州の国、遠山の里に、むかし若い農夫とその妻

が住んでいた。家は山あいの、淋しい場所にあった。ある夜、妻は、数年前に亡くなった舅が、夢にあられて、「明日、わしは非常な危険な目にあう。できるなら、わしを助けてくれ!」といった。夜が明けて、彼女はこのことを夫にむかつていった。そして彼らは、その夢について語り合った。二人とも、死んだ父がなにか用があるのだろうと思った。しかし、夢の言葉がなにを意味しているのか、想像もつかなかった。

朝食をすませてから、夫は畑へ行った。妻は家に残って機を織っていた。やがて、戸外に大きな叫び声が聞えたので、彼女は飛び上がった。戸口へ走りよると、土地の地頭が、狩りの一行をひき連れて、こちらへ近づいてきた。そのまま見ていると、一羽の雉子がわきをすり抜けて家へとび込んできた。彼女は不意に、昨夜の夢を思い出した。「ことによると、これはお舅さんかもしれない!」彼女は心に思った、「助けてあげなければならぬ!」そこで、鳥——すばらしい雄の雉子だった——の後を追って急いで家に入ると、苦もなくそれをつかまえて、空の米櫃の中へ入れて、蓋をした。

その後すぐ、地頭の家来たちが何人かはいつてきて、雉子を見かけなかったかと訊ねた。彼女は大胆にも、知らないと答えた。が、獵師の一人が、たしかこの家へ逃げ込むのを見たといった。そこで一行は、隅々にいたるまでのぞき込むようにして、さがし回った。しかし、米櫃をさがすことまで思いつく者はなかった。いたる所しらべてみたが、なんの手がかりもなかったので、みんな鳥はどこか穴から逃げて行ったにちがいないと思いきった。彼らはそこで立ち去った。

農夫が家に帰ってくると、妻は彼に見せようとして、米櫃に隠したままにしておいた雉子の話をした。「捕えたとき、すこしもがきませんでしたよ」妻はいった、「そして米櫃の中で、たいそうじつとしていました。きつと、お舅さんにちがいありません」農夫は米櫃のところへ行き、蓋をあけて、鳥を取り出した。鳥は、まるで飼いならされたように、手の中にじっとしたまま、いかにも平然と彼を見ていた。目の片方がつぶれていた。「父も片方の目がつぶれていた」農夫はいった、「右目が。この鳥の

右目もつぶれている。ほんとに、これは父のようだ。見ろ！いつもの父のような目つきでこいつは見ている……かわいそうに父は、『鳥になつてゐるからには、獵師どもにつかまるより、子供たちに食わせてやるほうがましだ』と心に思っているにちがいない。昨夜、お前がみた夢の意味はそれだ」こういい添えると——氣味の悪い笑いを妻のほうへ向けて、雉子のくびをひねった。

この畜生にも劣る仕業を見て妻は、悲鳴をあげて叫んだ。

「まあ、なんてひどい人！ あなたは、鬼です！ 鬼のような心をもつた人でなければ、そんなことできるはずがありません！……そんな男の妻でいるくらいなら、死んだほうがまだましです！」

そういつたかと思うと、草履をはく間もあらばこそ、戸口へとんで行つた。とび出したとき、彼はその袖をつかんだ。が、女はそれを振り切つて駆け出し、走りながら泣きつづけた。こうして、はだして女は走りつづけて、とうとう町へ着くと、まっすぐに地頭の居館へ急いだ。そして、涙ながらに、地頭にいつさいを訴えた——狩りの前夜にみた夢の話、雉

子を助けようとして隠したこと、それから夫が彼女を嘲って、雉子を殺したことなどを。

地頭は女にやさしい言葉をかけて、家来によく面倒をみてやるよう下知をあたえた。しかし、夫は召し捕えるように命じた。

翌日、農夫は取調べをうけた。そして、雉子を殺したことにして真相を白状させられて、刑を申し渡された。地頭は、彼にむかっていった。

「よほどの悪心を持った者でなければ、そのほうのやったようなことはできるものではない。そんなねじくれた奴がいるとは、土地にとつて迷惑千万。当地の住民は、孝心を重んずる者ばかりだ。そんな所に、そのほうのような奴を住まわせておくわけにはいかぬ」

こうして、農夫は土地から追放され、万一、帰ってきたさいには、死罪に処せられることになった。が、女に対しては、地頭は土地をあたえた。それから、のちに、よい夫を持たせてやった⁽⁵⁾。

授業においては、古典の導入授業ということもあり、

『沙石集』（現代語訳なし）と「雉子の話」の本文を上下にプリントし、最初に「雉子の話」の内容を読むことで、学習者に『沙石集』の内容について考える材料を与えたうえで、グループで『沙石集』の本文解釈について考える時間を作った。

次に、『沙石集』と「雉子の話」の相違点を見つける作業に入る。授業の目標は、小泉八雲が『沙石集』を改編した部分を鏡にしながら、逆に『沙石集』「先生の父の雉になりたるを殺したる事」の内容について踏み込むことである。そのために、『沙石集』と「雉子の話」の相違点から、「雉子の話」の作者である小泉八雲の意図を考えましよう。」ということ課題としたプリントを配布した。具体的には、以下のように八雲が改編した部分とそれによる効果について二カ所挙げるよう指示した。まず、各自で考えたうえで、その後グループで共有することにした。

【A『沙石集』と「雉子の話」との相違点（小泉八雲が改編したところ）】

←

【B効果（小泉八雲の意図）】

次に、実際に各グループから挙げられた相違点を示す。
当然重複するものもあったが、概ね次のような相違点が挙げられた。

【A『沙石集』と「雉子の話」との相違点（小泉八雲が改編したところ）】

①「雉子の話」では、「家は山あいの、淋しい場所にあった。」と住んでいる家の描写が具体的になっている。

②『沙石集』では夢の中の舅のことばが具体的であったが、「雉子の話」では抽象的なものになっている。

③『沙石集』では、舅は夢になかで泣きながら語っており、その姿を妻も哀れに思っているが、「雉子の話」では省略されている。

④『沙石集』では妻は夢のことを夫に言わなかったが、「雉子の話」では妻は夢のことを夫と共有している。

⑤『沙石集』では雉を釜の中に、「雉子の話」では空の米櫃に隠した。

⑥夫は雉子を殺すとき、『沙石集』では「親子の契りなれば、父の慈悲いとほしく思ひて、子に食はれんやとてこそおはしつらめ」と言っているが、「雉子の話」では「鳥になっているからには、獵師どもにつかまるより、子供たちに食わせてやるほうがましだ」と心に思っているにちがいない」となっている。

⑦農夫が雉子の首をひねった後の妻の言動が、『沙石集』では単に「あまりに心憂かりければ」としか書かれていなかったが、「雉子の話」では「この畜生にも劣る仕業を見て妻は、悲鳴をあげて叫んだ」、「あなたは、鬼です!」、「そんな男の妻でいるくらいなら、死んだほうがまだましです!」と具体的になっている。

⑧『沙石集』では、夫は「逆罪の者」として処罰され、妻は「情けある者」として「家」が与えられ、「公事」が免除されているが、「雉子の話」では夫は「よほどの悪心を持った者」として処罰され、妻には「土地」と「よい夫」が与えられる。

両本文の相違点を見つけるといふ課題を出すことで、学習者はよりしっかりとテキストに向き合うことができ

たのではないだろうか。次に、それぞれの効果について、各グループからの意見を挙げる。

【B効果（小泉八雲の意図）】

①『沙石集』より貧しい生活を送っている感じを与える。

②・読者に今後起こることをあれこれ想像させる。

・夢の「危険な目にあう。助けてくれ」という内容が、地頭の狩りによるものか、夫によるものか分からなくし、読者が深く考えることができる。

・内容を短くすることで現れた雉子が舅だと気づいたときの衝撃を大きくしようとした。

③「雉子の話」では、舅が苦境に立たされていることや雉子に生まれ変わった舅を哀れに思う妻の態度が省略されることで、『沙石集』で描かれるほど、親子のつながりが深くないことを表している。

④夫に自然に話しておくことで、後でお父さんを殺してしまうときに、夫がひどいというのを強く表している。

⑤貧乏であったことを、空の米櫃だったということによって表している。

⑥・「親子の契り」と聞くよりも「子どもの方がまし」という表現をする方が、夫の自分の親に対する気持ちが軽いということが分かる。

・農夫をより悪い人間として描こうとしている

⑦・妻の発言があつた方が夫の悪い行動が目立つ

・夫に対する妻の絶望の気持ち伝わる

⑧「土地」と「よい夫」が与えられ、今後妻がよりよい生活が送れることが暗示されている。

須田千里氏は、小泉八雲の「雉子の話」の原拠が『沙石集』であること、そして『沙石集』との相違点についていくつか挙げられたうえで、「雉子の話」について次のように述べておられる。⁶⁾

父の生まれ変わりと知りながら、食うために雉子を殺す冷酷で邪悪な夫と、舅思いで、夫の非道にショックを受ける心優しい妻の対比が本作の眼目であり、これを強調したいことがはっきりする。

「雉子の話」の「読み」についても掘り下げていきたいが、本論文は、『沙石集』の成立した時代背景につい

て理解することを通して、「古典」の世界に触れることが目標であるので、「雉子の話」の読みの授業に関しては稿をあらためたい。

では、「雉子の話」と比較することで明らかになった『沙石集』の内容について考えてみたい。

まず、「雉子の話」と大きく異なるのは、『沙石集』では妻がみた夢の内容が具体的であるということである。舅は、妻の夢のなかで「明日、地頭殿の御狩に、我が命、助かりがたかるべし」と、地頭殿の狩りで自分の命が危険にさらされることを語り、その後家に逃げ入ることがあれば隠してほしい、片目が不自由であることを目印としてほしいと泣きながら告げる。このように、『沙石集』では夢の内容が具体的に示される。【B効果】のところでは「読者に今後起こることをあれこれ想像させる」などの意見が出されたように、「雉子の話」では夢の内容を抽象的に描くことで、読者にその後の展開を考えさせ、興味を引くといった効果を生むと考えられた。逆に『沙石集』では、夢の内容が具体的に描かれることで、その後の展開が予想されるということになる。実際、夢に見たとおり、妻は「地頭殿の鷹狩」の際に家に逃げ込んだきた「雉」を見て、「夢に見つるに、この事にや」と了

解して、雉を「釜の内に隠」す。

次に、夢での舅の様子を見た妻の反応が『沙石集』では語られる。「物思ひたる姿にて、泣く泣く語ると見て、あやしく、哀れに思ふほどに」と、泣きながら願う舅の様子を見て、妻は「あやしく、あわれ」に思う。この後の雉の目が不自由であることを知った場面でも、妻は舅に対して「哀れなる事かな」と涙を流している。この「哀れ」について、須田千里氏は、「死後畜生に転生した舅への哀れみ」であると述べておられる。つまり、妻は畜生道に落ちた義父をかわいそうに思っているということになる。

次に大きな相違点は、雉をねじ殺すときの夫のことばである。「狝師どもにつかまるより、子供たちに食わせてやるほうがましだ」と「気味の悪い笑い」を浮かべた「雉子の話」に対して、『沙石集』では妻から夢のことを聞き、雉の目が不自由であることを確認した夫は、「げにも父にておはしけり。生きておはせん時も、目の悪しくおはせしが、違はぬ事の哀れさよ。親子の契りなれば、父の慈悲いとほしく思ひて、子に食はれんやとてこそおはしつらめ」と、雉に転生した父に哀れと思ひながらも、父が「親子の契り」があるので「慈悲」の心で、自分た

ちに食べられるために逃げ込んだと述べる。親子のつながりがほとんど読み取れない「雉子の話」に対して、『沙石集』では、父に対して敬語が用いられていないことは気になるが、「哀れ」「親子の契り」「慈悲」と父と子のつながりが読み取れる。

その結果、夫は、「雉子の話」においては、「よほどの悪心を持った者」、「ねじくれた奴」として追放される。

一方、『沙石集』においては、「逆罪の者」として、国を追われることになる。対する妻は「情けある者」として優遇される。先に示したように、須田千里氏は、「雉子の話」が「冷酷で邪悪な夫」と「心優しい妻」の「対比が眼目」であると指摘されたが、その対比は表現の強弱の違いがあるかもしれないが、『沙石集』においても、「逆罪の者」と「情けある者」として描かれていることになる。

以上、「雉子の話」との相違点を中心に、『沙石集』の内容について考えてきた。グループでの話し合い等において、学習者からもさまざまな意見が出されたが、『沙石集』「先生の父の雑になりたるを殺したる事」は、父が転生した姿であると分かっているながら、雉を殺した「逆罪の者」である夫と雉に転生した舅を哀れに思い続

けた「情けある者」である妻の話であると考えることができた。

そして、本話成立の背景となっているのが「仏教」である。そのことは、地頭から夫に告げられた「逆罪の者」という語句からも明らかである。『日本国語大辞典』（小学館）によると、「逆罪」は仏教の言葉で、

理にそむく極重の悪罪。無間地獄に落ちる罪だから、無間業という。五逆罪、七逆罪などがある。中世、特に主人や親をあなどる行為のこと。不忠不孝の罪。

と、「理にそむく極重の悪罪」で、中世では「親をあなどる行為」とある。つまり、『沙石集』では親を殺したことに、夫は処罰されたということになる。「先生の父の雑になりたるを殺したる事」というタイトルからも明らかのように、本話が死後転生したかたちであっても親を殺すと重罪に処せられるという教訓譚ともなっているのである。そして、「雉子の話」では「逆罪の者」という語は用いられておらず、「よほどの悪心を持った者」と言い換えられている。つまり、八雲は仏教色を排除したことになる。『沙石集』では、それ以外にも、

「生々世々」、「契り」、「慈悲」といった仏教に関する語が用いられている。併せて、畜生道に落ちた舅を哀れむ妻の姿も描かれていた。ジャンルでいうと、『沙石集』は鎌倉時代に無住によって編まれた仏教説話集であるので、「仏教」がその成立に大きく関わっているのは当然のことである。ただ、文学史を学ぶなかで単に『沙石集』＝「仏教説話集」という知識を身につけることも必要であるが、実際に本文を丁寧に読むなかで、「逆罪」やそのほかの仏教に関する語が用いられていることを確認することで、その作品が成立した背景についても考えることになり、それによってさらに『沙石集』の読みも深めることができるのではないだろうか。同時に、明治時代に成立した「雉子の話」との違いについても考えることにつながる。

『高等学校学習指導要領解説 国語編』には、「言語文化」の授業について、「古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること」、「作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を探まえ、内容の解釈を深めること」といったことが必要であると述べられており、そのような意味で、「言語文化」の教材として『沙石集』所収の「先生の父の雉にな

りたるを殺したる事」は有効になるのではないだろうか。また、「雉子の話」の本文と同じプリントで配布することで、『沙石集』の内容理解にもつながり、「古典」の導入教材としても活用できよう。

また、『高等学校学習指導要領解説 国語編』「四 内容の取扱い」には、「言語文化」で扱う教材についても述べられている。

(4) 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 内容の「思考力、判断力、表現力等」の「B 読むこと」の教材は、古典及び近代以降の文章とし、日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに、我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう、我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること。また、必要に応じて、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができること（傍線筆者）

このなかで、「必要に応じて、伝承や伝統芸能などに

関する音声や画像の資料」も教材となり得ることが述べられており、『沙石集』を原拠とする本話も近年落語化されている。柳家喬太郎氏は、小泉八雲の「雉子の話」と「かけひき」をもとにして「雉子政談」という落語を創作している。終盤、「かけひき」に登場する生首を用いた鬼気迫る部分があるので、教材に採用するかは検討しなければならないが、鎌倉時代→明治→平成と『沙石集』所収の「先生の父の雉になりたるを殺したる事」がどのように享受され、展開したかを考えることもできよう。

以上、高校一年生を対象に行った『沙石集』「先生の父の雉になりたるを殺したる事」の授業について述べてきた。小泉八雲『骨董』所収の「雉子の話」との相違点を通して、『沙石集』の読みを深めるとともに、『沙石集』が成立した背景についても考察し、「仏教」がその成立に影響を与えていることについても考えることができた。学習者たちは中学校の「歴史」の授業で、鎌倉仏教についてすでに学習している。実際に、本文のなかで仏教に関する語が使用されていることを知ること、当時民衆の間に仏教が広がっていたことも実感できたのではないだろうか。なお、本授業の対象は高校一年生で、

「古典」の導入として実施した。冒頭に述べたように、現代の国語科教育では、特に古典教育や文学教育に関して多くの課題を抱えている。そのような状況において、学習者がよりスムーズに高等学校での「言語文化」の授業に入っていけるような環境を作らなければならない。

注

(1) 明星大学で行われたシンポジウム「古典は本当に必要なのか」については、『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』（文学通信・二〇一九年九月）にまとめられている。

(2) 『高等学校学習指導要領解説 国語編』・「3 内容」・「(2) 我が国の言語文化に関する事項」・「イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること」には、

中学校第三学年のAを受けて、古典の世界に親しむために、古典の作品や文章の歴史的背景や文化的背景を理解することを示している。

ここでの歴史的・文化的背景とは、作品や文章について、その著された時代が我が国や外国の歴史の中でどのような時代に位置し、また、当時の生活様式や社会制度、人々の価値観、人生観、美的観念などがどのような特徴をもっていたのかなどの事柄のうち、その作品や文章の成立に影響を与えていると思

われる事柄を指す。この中には、作品が成立した舞台などの地理的状況や書き手の置かれていた状況といった作品成立の背景なども含まれる。

古典の世界に親しむとは、古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感じることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。作品や文章に関する歴史的・文化的な情報などを単なる断片的な知識として理解するのではなく、作品や文章に対する影響を与えたものとして理解することを通して、古典の世界のもつ豊穣さや魅力に気付かせることが重要である。

と、「歴史・文化的背景」や「古典の世界を楽しむ」といったことについて、定義されている。

- (3) 「『この雨の夜にこの羅生門の下で』考―古典の中の『羅生門』―」(『文藝論叢』第九二号・二〇一九年三月)。

- (4) 『沙石集』の本文は、『沙石集 新編日本古典文学全集 52』(小学館・二〇〇一年八月)による。なお、傍点部は中高生が用いる古語辞典には載せられていない語であったので、「悪しく」に置き換えた。

- (5) 小泉八雲『骨董』『雉子の話』の本文は、『小泉八雲集』(新潮文庫・一九七五年初版)による。

- (6) 須田千里氏『怪談』『策略』と『骨董』『雉子の話』の原拠「『文学』第一〇巻・第四号、二〇〇九年七・八月)。

- (7) 「生々世々」・「契り」・「慈悲」について、『日本国語大辞典』(小学館)には、

「生々世々(しやうじょうせぜ)」…仏語。生まれかわり死にかわりして経る多くの世。永遠。永劫。

「契り」…前世から定まっていた、どうすることもできない宿命。前世からの約束。

「慈悲」…仏語。衆生をいつくしみ、樂を与える慈と、衆生をあわれんで、苦を除く悲。喜びを与え、苦しみを除くこと。

とあり、『沙石集』においては「仏教」に関する語が用いられていることがわかる。

- (8) 注(2)参照。

- (9) 「柳家喬太郎落語集 アナザーサイド Vol. 4 梅津忠兵衛／猫屏風／雉子政談」(日本コロムビア・二〇一四年五月)

(本学准教授)